

大口玲子歌集『ザベリオ』

横山未来子

さまざま祈りの形

タイトルの『ザベリオ』はフランススコ・ザビエルのことだそうである。本歌集では、息子をうたった歌と信仰の歌がその量、質ともにまず強く印象に残る。

- ・かたつむりつの出すまでを子と待てるこの世の時間長くはかなし
- ・われをもつとも傷つけることができるのはわが息子 桃に指をぬらして
- ・子は読書感想画を描き戦争孤児の涙をみどり色に塗りたり

一首目、蝸牛を見つめている時間はゆっくり長く感じられるが、一方でひと世の中で子と過ごす時の貴重さを思うと、それはとても短く儂いものなのだ。「この世の時間」という表現から、この世は仮の住まいであるというキリスト教の信仰を感じる。二首目は、皮を剥かれ汁のにじんだ桃の生々しさが「われをもつとも傷つける」と

いう内容を象徴している。息子は血肉を分けた存在であり、かつ異性でもあるからだろうか。母と息子の関係の奥深さが思われる歌である。三首目は、水色でも血の赤でもない「みどり色」の涙の異様さが「戦争孤児」の苦しみとそれを鋭敏に感じ取った子の心を伝えている。息子の歌では他にも、へうつとりと紙の手裏剣打ちて子は猿

飛佐助を師と仰ぐなりなど、そのキャラクタ―が魅力的にうたわれた歌も多い。

- ・差し出されたれば慎重に飲み比べ酸き葡萄酒をわれは選びぬ
- ・もしこれが共謀ならば共謀の真中にイエス立ちたまふべし
- ・言ひ切らむとしては怯みしわたくしか「あなたを措いて誰のところか」

信仰の歌を引いた。「酸き葡萄酒」は十字架上のイエスが気付けとして飲まされた葡萄酒を連想させる。日常の中でもイエスの苦しみに少しでも与ろうという思いの表れだろう。二首目には、イエスへの信頼と、共謀罪（テロ等準備罪）への批判がうたわれている。三首目の下句は、カトリックの

聖体拝領の際の祈りの一文らしい。家族などのこの世の大切な存在を思うと、この言葉を「言い切」ることが出来ない自分もいたのだらう。それは反面、神に祈るという行為に対する作者の誠実さを表している。・戦争が団栗の中に来てみると少年はその手をひらきたり

作者は、世界が不穏な方向へ傾く気配に危機感を抱くだけではなく、デモに参加し、沖繩を訪れ、自身の言葉で発信する。団栗の歌は不思議な一首だ。普通は少年が拾って遊ぶ団栗が、その形状から弾丸に見えて来る。渡辺白泉の句へ戦争が廊下の奥に立つてゐたを、下敷きにしてると私は解釈したが、息子を含む「少年」の世代に迫る戦争の不気味な蠢きを表現した一首なのではないだろうか。

- ・ひるがへりつばめ去りたる窓外のひかりの秋にきみは聞はず
- ・水辺の森公園へ行けば鳥の時間ながれて鳥の声、きみの声

一首目は入院中の小紋潤を、二首目は亡き古川典子をうたった歌である。他者を思う気持ちは、すなわち祈りである。さまざま祈りの祈りに溢れた第六歌集である。